

平成 23 年度病虫害発生予報第 8 号

平成 23 年 9 月 8 日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区分	農作物名	病虫害名	発生時期	予想発生量
普通作物	ダイズ	ハスモンヨトウ	—	やや多い
		カメムシ類	—	平年並
果 樹	ナ シ	黒斑病	—	平年並
		黒星病	—	やや多い
		クワコナカイガラムシ	やや遅い	平年並
		シンクイムシ類	平年並	平年並～やや多い
	ブドウ	べと病	—	やや多い
		ブドウトラカミキリ	平年並	平年並
チャノキイロアザミウマ		—	やや多い	
共通 (ナシ、カキ)	ハマキムシ類	平年並	平年並	
	カメムシ類 (チャバ ^ハ 初カメシ)	—	やや少ない	
野 菜	ネ ギ	カメムシ類 (クギ ^ハ カメシ)	—	やや多い
		黒斑病	平年並	平年並
		ネギハモグリバエ	平年並	やや多い
	ネギ、ナガイモ	ネギアザミウマ	平年並	やや多い
		シロイチモジヨトウ	平年並	やや多い
	ナガイモ	炭疽病	平年並	平年並
		ナガイモコガ	平年並	やや多い
		ハダニ類	平年並	やや多い
	キャベツ、 ブロッコリー	べと病	平年並	平年並
		黒腐病	平年並	やや多い
		軟腐病	平年並	やや多い
		コナガ	平年並	平年並
		ヨトウムシ	平年並	やや多い
	キャベツ、ブロッコリー、 仔ゴ	ハイマダラノメイガ	平年並	やや多い
ハスモンヨトウ		平年並	やや多い	
シ バ	さび病	平年並	平年並	
	スジキリヨトウ	平年並	やや多い	
	シバツトガ	平年並	やや多い	

気象予報 (抜粋)

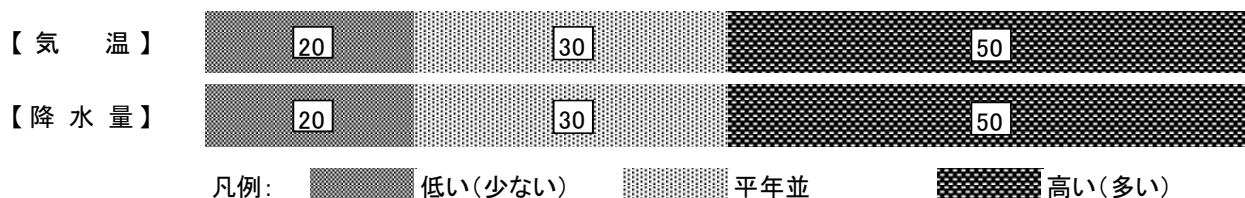
1 か月予報 (9月3日～10月2日: 9月2日、広島地方气象台発表)

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

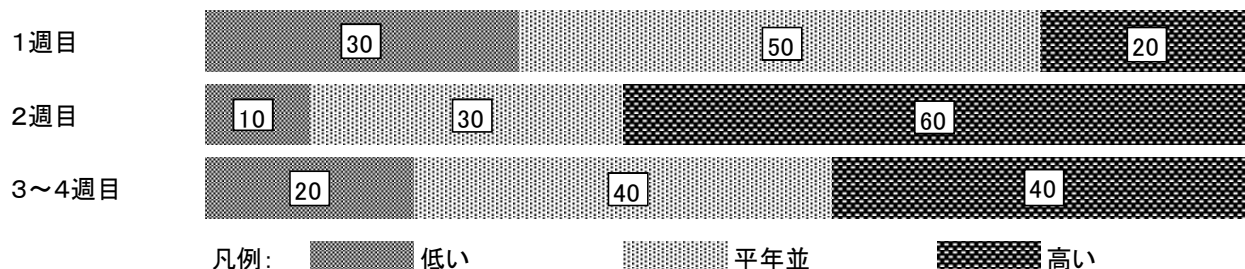
天気は数日の周期で変わるでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確立50%です。降水量は、多い確立50%です。

週別の気温は、1週目は平年並みの確率が50%です。2週目は高い確率が60%です。3～4週目は平年並みまたは高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



普通作物

[ダイズ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月のフェロモントラップにおける雄成虫の総誘殺数は、平年に比べてやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 中齢～老齢幼虫が混在する場合は、ロムダン粉剤DL、ミミックジョーカー粉剤DL、ラービソフロアブル、マトリックフロアブル、フェニックス顆粒水和剤、プレバソフロアブル5等を散布すると、比較的効果が高い。

イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数3～5か所以上とする。なお、白変葉の確認にあたっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内でも観察を行う。

2 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並み

(2) 予報の根拠

ア 予察灯における総誘殺数は平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年並みと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

近年、9月以降に密度が急増する傾向があるので、基幹防除終了後も引き続き発生状況に注意し、発生が多い場合は追加防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）における新梢葉での発生量はほぼ平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉の発病増加と花芽への感染を防ぐため、収穫終了後の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、収穫終了後にアントラコール顆粒水和剤500倍液などを散布する。なお、現在、新梢葉の発病が多い園では、収穫後に必ず2回の防除を行って、病原菌の花芽への侵入を防ぐ。

ウ 越冬菌密度を下げるため、落葉後（11～12月）の落葉処分を励行する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 夏期には高温乾燥条件により発生は停滞していたが、春期には一部の園で発生が多かったため、病原菌密度は高いと推察される。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期の発病は早期落葉と越冬菌密度の増加につながるため、収穫終了後の薬剤散布を徹底する。

イ 収穫終了後にアントラコール顆粒水和剤500倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを散布する。

ウ 多発園では、10月下旬及び11月上旬にデランフロアブル1,000倍液又はチウラムフロアブル（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍液などをそれぞれ1回散布する。

エ 越冬菌密度を下げるため、落葉後（11～12月）の落葉処分を励行する。

3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（北栄町）における発生量は平年並である。

イ 第2世代の幼虫ふ化時期は、平年よりやや遅い8月下旬～9月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期に本種の発生が認められる園では、翌年に多発する可能性が高いので、収穫後の防除を徹底する。

イ 多発園では、収穫が終わり次第ダイアジノン水和剤34の1,000倍液などを散布する。

4 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並～やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類成虫の誘殺数は、ほぼ平年並である。

イ 県予察ほ場（北栄町）では、8月下旬頃からシンクイムシ類による果実被害が増加傾向にある。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後、晩生品種（新高、新興、王秋など）の被害発生が予想されるため防除を徹底する。特に、二十世紀などで被害が多かったナシ園や地域では、被害発生が懸念されるので注意する。

イ 薬剤はアグロスリン水和剤2,000倍液、サムコルフロアブル10の5,000倍液、フェニックス顆粒水和剤4,000倍液などを散布する。なお、薬剤の散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守する。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予察の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地における発生量は平年と比べてやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋期の発病は早期落葉と越冬菌密度の増加につながるので、収穫終了後の薬剤散布を1～2回行う。

イ 薬剤は、収穫終了後にICボルドー48Qの50倍又は3-2式～6-3式ボルドー液を散布する。なお、無加温ハウス栽培でのビニール除去後及び露地栽培では、散布時に固着性展着剤を加用する。

2 ブドウトラカミキリ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（北栄町）における発生量は、ほぼ平年並である。

イ 成虫羽化最盛期は、ほぼ平年並の8月下旬～9月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期は9月中旬頃であり、薬剤はスミチオン水和剤40の800倍液などを散布する。

イ 本種の羽化は長期間に及ぶため、9月の防除では十分な効果が得られない場合がある。そのため、被害が多い園では、必ず10月中旬にモスピラン水溶剤2,000倍液などを追加散布する。

3 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）では被害果がやや多くみられる。

イ 向こう1か月の気象予報から、本種の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発園では、収穫終了後にパダンSG水溶剤1,500倍液などを散布する。

イ 9月に発生が増加すると越冬量が多くなり、翌年の発生源となるため、多発園では防除を徹底する。

4 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、フェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並となっている。

イ 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）では、平年並の発生量である。

ウ 向こう1か月の気象予報とこれまでの発生経過から、次世代成虫の発生ピークはほぼ平年並の9月中～下旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 近年、秋期の気温が高めに推移し、9月以降多発生となるほ場が認められる。

秋期の発生は越冬密度を高め、翌年春の発生量の増加を招くため、収穫後であっても注意してほ場を観察する。

イ 多発園では、サイアノックス水和剤の1,000倍液などを追加散布する。

[共通（ナシ、カキ）]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない（チャバネアオカメムシ）

やや多い（クサギカメムシ）

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺数は平年と比較してやや少なく、クサギカメムシの誘殺数は平年と比較してやや多い。

イ 8月下旬現在、集合フェロモントップにおけるチャバネアオカメムシの誘殺数は平年と比較してやや少ない。

(3) 防除上注意すべき事項

ア クサギカメムシの発生量がやや多くなっている。果樹園内にカメムシ類の発生が認められた場合は、各地域の防除暦などを参考に薬剤を散布する。

イ 今後、山林で餌不足となった場合などはカキなどを中心に果樹園に飛来する恐れがある。そのため、定期的に果樹園などを観察し、早期発見に努める。

野 菜

[ネ ギ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並
発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 本病は平均気温25℃前後が発病適温であり、降雨が多い場合に多発する。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 根傷み、肥料不足になると発病しやすいので、肥培管理に注意する。
- イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを発病初期から散布する。発病が増加する場合は、ロブラール水和剤1,000倍液などを散布する。

2 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 県予察ほ場（北栄町）における発生量は平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、ベストガード粒剤6kg/10a株元処理、アグロスリン乳剤2,000倍液、オンコルマイクロカプセル1,000倍液などの散布をする。

3 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並であるが、ほ場間差が大きく、多発園も散見される。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ハチハチ乳剤1,000倍液、ランネート45DFの1,000倍液、オンコルマイクロカプセル1,000倍液などを7~10日間隔で薬剤を替えて散布する。

[ネ ギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。
- イ 現地調査ほ場（ネギ）における発生量は平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 若齢幼虫期が防除適期である。これを逃すと極めて防除が困難となるため、早期発見に努め、早めに防除を行う。
- イ ネギの防除薬剤は、トルネードフロアブル1，000倍液、スピノエース顆粒水和剤5，000倍液などを散布する。
- ウ ナガイモ（ムカゴを含む）の防除薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1，000倍液を用いて、5～7日間隔で2回程度防除を行う。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。
- イ 茎葉が繁茂して薬液がかかりにくい状態なので、丁寧に薬剤を散布する。
- ウ 大雨や台風の直後に、天候が回復した後できるだけ早く薬剤散布する。
- エ 防除薬剤は、ダコニール1000の1，000倍液（ムカゴにも登録あり）、ジマンダイセン水和剤400～600倍液、ベルコートフロアブル1，000倍液などを散布する。
- オ ムカゴを収穫する場合は、栽培指針を参考にしながら、薬剤を選択する。

2 ナガイモコガ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）における発生量はやや多い。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続きやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア アタブロン乳剤2，000倍液（ムカゴにも登録あり）、トレボン乳剤1，000倍液（ムカゴにも登録あり）などを7～10日間隔で2回程度散布する。
- イ 茎葉の繁茂により薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。
- ウ ムカゴを収穫する場合は、栽培指針を参考にしながら、薬剤を選択する。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）における発生量は平年並である。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤は、コロマイト乳剤1, 000倍液（ムカゴにも登録あり）、コテツフロアブル2, 000倍液（ムカゴにも登録あり）などを葉裏にも薬剤が付着するように丁寧に散布する。
- イ ムカゴを収穫する場合は、栽培指針を参考にしながら、薬剤を選択する。

[キャベツ、ブロッコリー]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生は認められていない。
- イ 本病は気温が比較的低温、降雨が多いと発生が多くなる。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア キャベツの防除薬剤は、ヨネポン水和剤500倍液、ダコニール1000の1, 000倍液、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤など）400～600倍液、リドミルMZ水和剤1, 000倍液などを予防散布する。
- イ ブロッコリーの防除薬剤は、リドミルMZ水和剤の1, 000倍液を10月から10日間隔で2～3回散布する。なお、本剤は花蕾形成前までの散布とする。

2 黒腐病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- イ 本病は、降雨が多い場合や、台風に伴う風雨によって発病が助長されやすい。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため害虫防除を徹底する。
- イ 肥料不足になると多発しやすいため、肥料切れしないよう注意する。
- ウ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待つできるだけ早く薬剤散布する。
- エ キャベツの防除薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅シン水和剤）1, 000倍液、ドキリンフロアブル500～1, 000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。
- オ ブロッコリーの防除薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅シン水和剤）1, 000倍液、キノンドー水和剤40の800倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

3 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は、気温が高く、降雨が多いと発生が多くなる。また、台風に伴う風雨によっても発病が助長されやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため、害虫防除を徹底する。

イ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待つことができるだけ早く薬剤散布する。

ウ キャベツの防除薬剤は、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー又は銅シン水和水剤）1,000倍液、ドキリンフロアブル800～1,000倍液、ヨネポン水和水剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

エ ブロッコリーの防除薬剤は、ナレート水和水剤1,000倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

4 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）でのフェロモントラップにおける成虫の誘殺数は平年並である。

イ 現地調査ほ場における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期～定植時には、アクタラ粒剤5の2g/株（育苗期後半）の株元散布、プレバソンフロアブル5の100倍セルトレイ灌注（育苗期後半～定植当日）などを処理する。

イ 本圃での発生時には、アタブロン乳剤2,000倍液、トルネードフロアブル1,000倍液、スピノエース顆粒水和水剤5,000倍液などを散布する。

5 ヨトウムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア キャベツの防除薬剤は、アタブロン乳剤2,000倍液、トルネードフロアブル2,000倍液などを散布する。

イ ブロッコリーの防除薬剤は、マトリックフロアブル1,000倍液、ランネート45DFの1,000倍液などを散布する。

6 ハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイムシ）

（1）予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。
イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア キャベツの防除薬剤は、プリンスフロアブル2，000倍液、スピノエース顆粒水和剤5，000倍液、トルネードフロアブル2，000倍液などを、1週間程度の間隔で散布する。
イ ブロッコリーの防除薬剤は、プリンスフロアブル2，000倍液などを散布する。

[キャベツ、ブロッコリー、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

（1）予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場におけるフェロモントラップの誘殺虫数は平年並である。
イ 現地調査ほ場（キャベツ、ブロッコリー）における発生量はやや多い。
ウ 向こう1か月の気象予報から、今後の発生量は引き続きやや多いと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。
イ キャベツでは、アタブロン乳剤2，000倍液、ノーモルト乳剤2，000倍液、トルネードフロアブル2，000倍液、マトリックフロアブル2，000倍液などを散布する。
ウ ブロッコリーでは、カスケード乳剤4，000倍液、プレオフロアブル1，000倍液などを散布する。
エ イチゴでは、アタブロン乳剤2，000倍液、マッチ乳剤3，000倍液、フェニックス顆粒水和剤2，000倍液、トルネードフロアブル2，000倍液などを散布する。

[シバ]

1 さび病

（1）予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

（2）予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地生産シバ調査ほ場における発病は認められていない。
イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

発生初期にバシタック水和剤75の500～1，000倍液、バイレトン乳

剤 2, 000 倍液などを散布する。

2 スジキリヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

若齢幼虫を対象にダイアジノン乳剤40の1, 000倍液、スミチオン乳剤1, 000倍液、スカウトフロアブル1, 500倍液などを散布する。

3 シバツトガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、ダイアジノン乳剤40の1, 000倍液、スミチオン乳剤1, 000倍液、スカウトフロアブル1, 500倍液などを散布する。

[お知らせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます (<http://www.famic.go.jp/>)。

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jpnp.ne.jp/tottori/>

病虫害発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類）、病虫害の診断方法などの参考情報をお知らせしていますので、御利用ください。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病虫害防除所

(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)

もしくは

鳥取県農林総合研究所農業試験場環境研究室

(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県農林総合研究所園芸試験場環境研究室

(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※予報第9号の発表は、10月6日（木）の予定です。